

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

浦和時代の水上勉：内田潔氏に聞く

著者	掛野 剛史, 大木 志門, 高橋 孝次
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	18
ページ	346(1)-333(14)
発行年	2018-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001186/



浦和時代の水上勉

― 内田潔氏に聞く ―

二〇一九年は、水上勉（一九一九―二〇〇四）の生誕百年にあたる。その長い文学活動の中で、純文学と大衆文学の間を越境しながら多彩なジャンルの作品を発表し、多くの読者に迎えられた彼は、戦後文学において重要な位置を占める作家である。ただ、その本格的な研究はようやく緒についたところであり、そのために必要な基礎研究も立ち遅れているというのが現状である。

こうした状況において、本稿の筆者たちはこれまで水上勉の長女水上路子氏のご協力のもと、彼が遺した膨大な資料の整理調査を行い、その成果を随時報告するとともに、水上勉の足跡を辿り直し、現地調査や聞き取り調査などを行い、年譜的事項の再検討を行ってきた。

故郷の福井で代用教員を務めていた水上勉は、終戦後にその職を辞して夫婦で上京、東京神田で印刷工場を経営していた妻の叔父のもとに身を寄せ、叔父の資金的援助のもと、友人の山岸一夫とともに虹書房を立ち上げ、出版活動と自身の創作活動に励むことになる。そして後に叔父の家を出て、浦和市白幡町（現さいたま市南区白幡）の内田辰男氏方に身を寄せる。戦後混乱期のこの

掛野剛史・大木志門・高橋孝次

時期の様子は、当時刊行された自身の著書『フライパンの歌』（新潮社、一九四八年）に収録された私小説的作品に描き出され、後年の自伝的小説『凍てる庭』（新潮社、一九六七年）、『冬日の道』（中央公論社、一九七〇年）などでも繰り返し描かれているものの、仔細にその中身を検討してみれば、そこには小説的虚構や作品毎の記述の齟齬などがあることがわかる。もとより「事実」とは何かとは大変重い問題だが、研究の出発点としては、作家の言を鵜呑みにせず、可能な限り「事実」を明らかにしておく必要があるだろう。

まずこれまでの年譜の記述を確認しておきたい。

昭和二十一年（一九四六）二十七歳

三月、長女路子誕生。四月、虹書房を起こし、「新文芸」を発売。創刊号には「水上若狭男」の名で、「もぐら」を発表。この号の執筆者は、中山義秀、中島健蔵、上林暁らであった。八月、信州松本に疎開中の宇野浩二を訪ね、執筆を依頼。これが契機となって、以後、文学の師とする。田中英光、梅崎

春生らと親交を結ぶ。

昭和二十二年（一九四七）二十八歳

春、虹書房が潰れ、残務整理にあたる。

昭和二十三年（一九四八）二十九歳

五月、宇野浩二と湯河原、熱海に旅行。短篇集『風部落』を刊行。七月、宇野浩二の推薦により、新潮社より『フライパンの歌』を刊行、ベストセラーとなる。十月、浦和市白幡町の内田辰男方に転居。新潮社に入社。季刊誌「新潮」に「わが旅は暮れたり——雁の寺」を発表。のちにこれが改作されて、直木賞受賞作の「雁の寺」になる。十二月、吉行淳之介、柴田錬三郎、青山光二、十返肇を知る。

昭和二十四年（一九四九）三十歳

二月、「借金の子節」を「真実」に発表。四月、童話集『父の舟 子の舟』を新潮社より刊行。妻敏子、子供を置いて家出。宇野浩二の口述筆記に通い、近くの弓町邑楽館、東大農学部、真砂町などの下宿を転々とし、のち文京区青柳町に移る。

この年譜において、『新文藝』の発刊が昭和二十二年四月となっているが、これは正しくは一月で、少なくとも昭和二〇年内には刊行されていることが水上の残した資料からはわかる。また浦和に転居した時期とされる昭和二十三年一〇月というのも、水上宛書簡の住所を見る限り、もう一年ほど早まりそうである。「凍てる庭」においては、年は明確に書かれていないものの、夏に初めて浦和の家を見に行くくだりがあり、その翌年に『フライパンの歌』が刊行されていることから、やはり浦和転居は昭和二十二年の夏と考え

るのが妥当だろう。⁴³ 作中、最初に内田家を見た時の印象は次のように描かれている。内田家は「内島家」となっている。

一四八番地の内島家は、中仙道に面して在った。私はその家の表札と母屋の建物をみて、こんな大きな家が間貸しするのだろうか、と首をかしげた。いかにも、このあたりの豪農の家に思えたからであつた。しっかりした建物で、二階屋根のタルキが扇子をひろげたように道へ大きく影を落している。びっちりとした格子戸も重そうであつた。古い土塀がめぐっているの、問題の土蔵はどこにあるのかわからなかつた。（『凍てる庭』『水上勉全集』一〇巻、一九七六年一二月九三頁）

「凍てる庭」によれば、この土蔵に当時の妻の母と姉夫婦が合流して、共同生活が始まるが、ほどなくして金を出し合い、浦和に家を新築し、全員で移り住む。だが妻が家を出て行き、夫婦の亀裂は決定的なものになる。子供を連れて再び土蔵に戻った時、内島家の女主人に「安田さん、心機一転してがんばって下さいね（略）土蔵の中で……いい小説を書いて下さいよ」と励まされ、「ほとんど感動に近い面持ちで女主人の顔をみつめ」（二五一頁）ることになった。その後、浦和から転居したのは「昭和二十四年から五年にかけての冬」（二七五頁）とのことであり、この期間は、私生活においても作家生活においても重要な時期となっている。したがって、この時期のことは後に本人によって詳しく書かれており、すでに引用している「凍てる庭」の他、「自伝抄——浦和

にいた頃」(『読売新聞』夕刊、一九七九年四月二一日～五月七日)でも回想され、また後に、内田家を再訪し、家族と再会したことが週刊誌の記事として取り上げられてもおり、近年でも新聞に取り上げられるなど、水上勉の作家的履歴としては比較的よく知られた一コマともいえる。ただ、水上の文章が強い影響力を持つ形でイメージが作られており、その言葉を相対化する可能性を持つ、関係者の本格的な証言は貴重である。

インタビューに応じていただいた内田潔氏は、内田辰男氏の弟で、内田家の七番目の末子にあたり、一九三七年生まれ。のちに朝日ソノラマ社に勤めたことから、その後も水上とは交流をもった。

なお、本稿は二〇一八年二月八日に内田潔氏のお宅で行ったインタビューをもとに筆者たちが構成したものである(括弧内は筆者たちによる注記)。資料についてもご提供ご教示賜った内田潔氏に御礼申し上げる。

内田家のこと、水上が来た経緯

— 内田家はいつから浦和にお住まいだったのでしょうか。

内田 三代か四代前じゃないですかね。おじいさんが教育に熱心で近辺の学校に土地を寄付しているんです。僕らが子どもの頃は、学校の校庭を指して「うちの土地だったんだよ」って。畑なんかだったところは地面の色が違ったんですね。

— 水上勉がお宅に来た時には、お父様はもうお亡くなりになっていたんですね？

内田 僕のおやじが亡くなったのは昭和十九年ですが、細かく言

うと、兄の内田辰男と姉の節子は、初めに母・つねと結婚した父親・内田春次郎の子で、子どもが一つか二つの時に死んでいるんです。その下の茂、羊子、孝子、知行、潔は、内田徳政という春次郎の弟の子なんです。だから、一つの家族になっているけど、おやじが二人いたわけだ。昔はそういうの、よくあったんだよね。— ご主人が亡くなって、その弟さんと再婚したってことですね？

内田 そういうことです。おやじはここからちよつと離れてますが、東浦和の方の大谷口(旧大谷口村、現さいたま市緑区・南区大谷口)の出身なんだよ。おふくろも善前や二十三夜(いづれも現さいたま市南区太田窪の地名)なんてところがありますが、実家はあのすぐ近くなんです。



図版① 内田家の兄弟
(右から節子、潔、辰男、羊子、孝子、茂、知行)

— 潔さんはお生まれは何年ですか

内田 一九三七年。兄弟はみな二つずつ違います。大正一四年が節子で亥年だったな。子供が七人ですけど、昭子っていうのが茂と羊子の間にいたんです。生まれる前に死んじゃったのかな。

— 水上が来た時は、潔さんは一〇歳か一一

歳ぐらいの時ですね。

内田 そうですね。僕の小学校の入学は昭和一八年か。あの人が来たのは僕の前、五年生だった時じゃないかな。来たのは夏頃です。キュウリや野菜がいっぱい採れる頃でしたから。昔は温室がないので大体七月前後なんです。有名な「十二日まち」という調宮神社のお祭り（毎年同所ので二月一二日に開催される）があるでしょ？ この白幡地区は七月の一四日がお祭なんです。それで、水上さんが私のところへ来てから、そのお祭でね。おふくろと一緒に白幡坂上ってバス停があるんですけど、この角に今はスーパリーになっていますが、金子儀一って酒屋だったんです（正式な店名は「金子商店」らしい）。水上さんは、ここから山ほど借金したはずだ。飲み逃げじゃないけどもね。うちの名前を出せば、どこでもツケができたから、お客さん来るともう大変だったんですよ、飲んでね。

ー 当時の水上の妻、敏子さんの姉夫婦も後に浦和に来たんですよ。

内田 家族もいましたね。離婚するちょっと前に敏子の姉夫婦が来たんですよ。確か今でも浦和にいるはずですよ。

ー 内田さんの家を出て、新築して建てた家ですね。

内田 当時、浦和市長（昭和二年四月より二六年四月まで）をやっていた松井計郎っていう人の空き地で、畑を借りたか買ったかして水上が家を建てるんです。それで、家ができて間もなく水上が離婚してわが家へ戻ってくるんです、落子を連れて。

僕は年がら年中、落子の子守させられた身です。しょっちゅう

遊びに連れて行ったりね。でも僕の周りが男の子の遊び相手ばかりでしょ。そうすると、邪魔になるんです。僕が「帰れ」って帰したりなんかして、後でおふくろに徹底的に怒られるんだよね。「落ちゃん、あんないさいのにお父さんもお母さんもないのにじっと我慢してるんだから」って。もう家族の一人、水上さん自身ももう家族の一人になってましたから。だから、オサムですか、敏子さんの弟は。

ー 松守修さんですね。

内田 水上さんが最初に浦和へ来るきっかけをつくったのは、その松守さんなんです。私のおふくろの弟が元師範学校の校長先生で当時は労働基準局にいて、その人が、白幡の家、大きいからどうだろうって。困ってる人がいて、ぜひ借りたいっていうのが水上さんだったわけです。それで同じ職場の松守さんが間に入って、おじさんも間に入って、わが家へ来ることになるわけですけど、当初、結婚してるってことを隠してたんだよね。神田の封筒屋（敏子の叔父の奥田家）の二階にいたりとか話してるうちに、実は子どもがいるという話になって。ですから浦和へ越してきて、しばらくは一人でいたんです。ところが、家族がいるんだったら呼びなさいと。それで敏子さんと落ちゃんと三人で来るようになったんです。水上家が住んだのは土蔵だといわれてますけど、浦和の家は見ましたでしょ？

ー 外からですけど拝見しました。

内田 土蔵といえば土蔵なんだけど、実はそんなことなくて、物置のところが格子になってたでしょう。あの部屋全部、中はトタン張りだったはずですよ。僕の子どもの頃、今時分の季節だと米俵



がぎっしり詰まっていた。小作の人たちが持つてきて、あそこへ全部押し込んだのね。つまり米蔵で、その二階が物置になってたんです。それで、ひな人形とか、五月人形だとか、それから旅館なんかで出てくるお膳があるでしょ。ああいうやつが五〇個ぐらいあったんです。今の家は建て替えちゃったんですけど、当時のわが家はウナギの寝床みたいに長い通りから入ってくるようになっていた。

(図面を書きながら) ここにトイレがあつて。それから、廊下がこうなつてて。これが旧中山道に面していたところなんです。現在の家は、この辺に三階建てがあつたでしょ。旧家は八畳六畳、六畳、八畳、それからもう一つ、四畳半だったかな。それで、渡り廊下があつて、離れになつていて、ここは今も前のままです。八畳



図版③ 水上が住んだ内田家の離れと蔵

んです。子供の時にここでキャッチボールできたんです。

— つまり水上家がいいたのは土蔵というより離れなんですね。

内田 土蔵と書いているけれど、あの人（水上）の作文ですから。この離れは、僕ら子どもの頃、入れてもらえなかった。金がいっとうある時に建ててるんだからね。ところが、それが空き家で貸してくれというので、始めは本当の土蔵の方でいいというんですよ。だけど人間が住むんだから、どうせ空いてるんだしこっちを使いなさいと。八畳に廊下でつながって床の間があって、違い棚があったりして。

— ちゃんとした部屋なんですね。ここは平屋なんですか。

内田 二階になってる。どうせ空いてんだからっていうんで両方自由に使っていた。

— 母屋の方は平屋ですか。

内田 二階です。二階に八畳二間付いていたんです。風呂場があつ

て倉庫があつて。だから二階もかなり広がったし。前がすぐ旧中山道で格子戸になってたんです。僕ら子どもの頃は二階へ上がるのは兄貴たちだけで、僕なんか、ちびだから下で寝るんだね。床の間があつて、昔の家ですから大神宮さまとか何とかって神棚がいくつもあつて、火の神さまと大神宮と、みんな、祭つてあるんです。それでこれは恐らく落ちちゃんも知らないと思うけども、蔵が二階屋になっていて、東側にも窓があるんです。それで隣の家があるんですよ。農家なんです。そうすると、お風呂場がひさしの下で風呂おけだけ置いてた。そうすると、水上さんが僕らの前で酔っぱらつてくると言い出すんですよ。「隣の娘が風呂へ入るんだよ、見えるんだよ」ってね。

— 敷地自体は今と同じですか。

内田 同じです。一五〇坪ぐらいじゃないかな。こっちに納屋があつた。二軒長屋で物置に使つた。あの人（水上）が書いてるけど、大きなケヤキの木があつた。

— 二本あつたつて書いてありますね（「巨大な樗が二本、この旧家のシンボルのように空を圧していた」自伝抄）。

内田 それからスギの木があつて、カシの木があつて。ケヤキの木は、一本はわが家のやつ。裏のうちのケヤキがここにある。僕ら子どもが四人ぐらいで抱えるような大きさだった。それで、台風の時はお母さんが怖い。小説やなんかで梅林があつたということを書いてるでしょ（「大きな母屋の奥は、ひろい中庭があつた。タタキをとおつてぬけるようになってる。中庭へ出ると、真正面に梅林がみえる。その梅林の一角にぼつんと大きな土蔵が建っている」「凍てる庭」九五頁）。あれは、隣の家の母屋がここにあつ

て、今言ったお風呂場の前の方が畑になっていた。ここにウメの木が一〇本ぐらいあった。井戸のここにもウメの木があった。根岸沼つてのが昔あったんですよ。用水の水。この水を利用したんだね。

―「凍てる庭」や「自伝抄」には浦和駅にリントクがあったという記述がありますが（「当時、浦和の駅前には十数台のリントクがいた」「凍てる庭」一五五頁）。

内田 リントクはないに等しいね。駅から道をずっと歩いて来ると、調宮神社がありますね。ここいらに東映の映画館があったんです。それから調宮神社を越えて、斜めに浦和駅へ行く近道があるんですよ。高砂小学校の脇。

― 小さかった落子さんが廊下を喜んで走って、内田家の母屋に入りびたりだったって書かれてますね（「神田の工場の二階にいた時より、ひろびろしているの、廊下をよろこんで走ったりして、離れにいる日は少なく、内田家の子のように母屋にいらびたりだった」「自伝抄」）。

内田 うちの子どもになつてた。妹みたいなものです。だから、さつきも言つたように遊んでやんないと怒られるんだから。それで水上が飲みだすと、飲んべえが集まってくるんだよね。ちょうど『フライパンの歌』が映画化される話があつて、ところが途中で駄目になつちゃうんだよね。そのお金をもらったわけだ。「潔、カネコ行つて酒買つてこい」なんて、買いに行かされるんです。普段、つけてばかりだけど、「あるんだから買つてきてくれ」つて。一升瓶ぐらいペロツと飲んじやうんだよね。さつき話したお祭の時には、あの人も一緒に酔っぱらつておみこし担ぐんだよ。

内田の家から出てきてるから内田で通つちやうわけだが、まさか小説書きだなんてのは当時は通用しないんだから。

― その頃は、小説家として見られていなかったんですね。

内田 まるつきり小説家という感じはないです。ただの書生ですよ。大工の息子ですから、ミカン箱に、当時はリントクと言ったか。紙を貼つて机を作つちやうんだよね。表札も入り口の所に、かまぼこの板で水上勉つて書いて、ここへ貼らしてくれてね。

― 潔さんも小説家という意識で付き合つてはなかったんですか。

内田 全然。ただ酔っぱらいで、おっかない兄貴ですよ。僕にとつては、怖い兄貴がまた余計に増えちゃつたつていうやつです。学校から帰るとすぐ言われたのが「勉強しろ」で、その勉強しろつて言うのが一人増えちゃつたわけだからね。

― 兄弟では長男の辰男さんが水上とは一番親しかったんですか。

内田 一等仲良かったのは茂だね。けんかもしたけど。取っ組み合いのけんかをしてましたよ。水上さんがその当時、思想的な部分でぶつかり合いするんだよね。茂さんに向かってコウモリだとか何とか、要するに都合よく振る舞つてるといふニュアンスで言つたら、「このやろう」つて取っ組み合いのけんかになつて、でも柔道やつてたから茂が絞め上げちやうんだよね。水上さんが「参つた、参つた」つてね。

― お酒の席ですか、それは。

内田 いや、まともな席で。「コウモリとは何事だ」「おめえこそ」つてけんかですよ。その代わりマージャンをよくやつたのは辰男の方だね。おかげで僕も会社行つてからマージャンには全然困らなかったです。奥住孫太郎という、もう亡くなった姉の節子の夫が

兵隊から帰ってきて持ち込んだんです。スマトラにいて、あそこに行った連中は近衛師団かなんかなんだよ。ちよっと離れてると、ものすごい飢えに苦しんだらしいんですが、そこでは敵の飛行機は一度も見ただことなかったと。そこで毎日マージャンをやった兄貴がこのうちでもやってたのね。水上さんと山岸一夫さんと、それと朝日の記者だね。藤村っていう仲間がいたんだ。後で藤村に「水上勉がうちにいたんだ」と言ったら、「おまえんとこ、行ったことあるぞ」っていつて言われて、「俺、あそこの息子ですよ」と言ったら驚かれてね。

― 水上のことは皆さん、「ペンさん」と呼んでたんですか。

内田 「ペンちゃん」だね。落ちゃんのこととは、兄貴なんかは「ふきべえ」って。俺は「落ちゃん」って言うんだけどね。

― 水上はお母様のことを「お母さん」って呼んでたんですね。

内田 「母さん」って。うちは「お」がないんですよ。お父さんは「お父さん」だけど、おふくろのことはみな「母さん」だった。

― 水上の奥さんの松守敏子さんについての印象はありますか。

内田 本を読むのが好きな人だったです。読むのが早かった。それだけは印象に残っています。もう読んじゃったのというぐらい本が好きだったんだよね。昼間は家にいて、夕方三時に、出ていた。白木屋じゃない？ 夕方出ていく。それで、逃げられちゃったって言うけども、あれは逃げるよね。当たり前だよ。

― 逃げられてもしようがないという印象がありますか。

内田 俺は子ども心にあつたよ。

― 水上家は家事とかはどうしてたんですか。

内田 それこそコンロしかなかった。階段の所にトタンの波打つ

たやつで一坪ぐらいのところに風よけだけ作って、そこでご飯作る程度だからね。井戸まで来て、米をといだりしてるわけですよ。― 水上もその当時は文潮社に行ってたんですよね。潔さんが学校から帰ってきたら家にいたりしたことなどはありますか。

内田 ありましたよ。それと昼、食事なんかうちでよく食べてたな、僕らと同じものを。

― 食事は母屋でしてたんですか。

内田 基本的には別だけど、みんなで食事する時は、わが家の方で。食事する部屋があつたんですよ。誕生日パーティーなんてのもそれぞれの誕生日にやって、落ちゃんの誕生日なんかもやったよ。水上さんはおやじが着ていた着物を着せられて。二重回しなんて知ってます？ あれもおやじのを着て、東京へ出て行く時に「母さん、あれ貸して」ってマントを着て出ていった。うちはそういう意味では、細かいこと気にしなかったんだね。だから、居候が一人増えたぐらいな感覚で。兄貴の友達なんかにも、うちから通ったのが何人かいるんだよね。その当時は余裕もあつたんだよ。食べるのも経済的にもね。それと、さかんにあの人が言ってたのは、（窪島）誠一郎さんのこと。僕に、「生きてればおまえと同じぐらいだ」って言うんだよね。

― 当時から気にしてたんですね。

内田 さかんに気にしてた。だから誠一郎氏に会って、あんた、音信不通だっただけの話で、本人は相当気にしていたよっていうことを教えてやりたくてね。

― 落子さんは浦和の時はずっと水上と一緒にいたんですか。

内田 あとで田舎の福井へ帰った。落ちゃんは岡田の方の小学校

ですよ。そこを出て、おばあちゃん、カンさんに育てられたんじゃないかな？ それで、（水上の弟の）亨さんなんかの家があつて、岡田の駅の所にお父さんがつくった旅館をやつた。大きな家で、これがおやじが建てた最後の家でした。あの子が行つたのは、一滴文庫のちよつと奥のところに亨さんなんかの家があるんですよ。確かそこに預けられたんでしょ。

― 浦和の時はまだ預けられていなかったんですね。

内田 まだこっちにいた。護国寺へ行く時に一緒に行つて、それから向こうへ行つたんじゃないかな？ そこで落ちゃんは、しょうゆかけて卵ご飯だつて言われて食わせられたはずだから。それでおふくろが「かわいそうに、落ちゃんはどうしたろ、どうしたろ」つて、さかんに言っていました。

内田書店のこと

― ご家族の皆さんは文学に関心があつたんですか。

内田 わが家は当時としたらちよつと変わつてたんだよ。僕が小学校の頃に『未完成』だとか『第九』だとかを、兄貴が古本屋やつた時に、早稲田かなんかの学生だった人が、金がなくてレコードを持つてきた。それで電蓄を買つてくれつて言つて。わが家はその当時、内田さんの家へ行くと電蓄が置いてありますつて村で話題になつたんだよ。

水上は当時しばらく宇野浩二の筆耕をやつたり、それから宇野浩二の名前を使って児童書がいっぱい出てゐるんです。『家なき娘』とか、それは要するに子どもの本に膨らましたり縮めたりして出してたんですよ。それを僕は読めと言われるんだよ。それで原

稿料は、宇野浩二経由でもらうわけだよ。

― 誰か小説家が来た記憶とかありませんか。

内田 宇野浩二さんは来てたし、それから、僕は覚えてるのは、田中英光。自殺したね。それから、正宗白鳥、梅崎春生。それとか、ミヤザキ何とかつていう児童文学作家だったな。浦和一女高は知つてるでしょ？ 一等上の姉・節子は、そこなんです。その正門の真ん前ぐらゐにいたんですよ。それなんかがよくフラフラと来ていた。調宮神社のすぐそばに利根川つていう古本屋があつたんだよ。それから調宮神社の南側に交番があつたと思うんですが、その反対側の角地のところに、古本屋さんのちっちゃいのがあつた。このおやじがやつぱり飲んべえなんだよね。当時は古本屋さんつていうのは夜中までやつてゐるんだよ。六畳ぐらゐのところで。電気一つ、ポンとつけて。本当に本好きが集まつてくるんだ。

― 内田書店つていうのを辰男さんが開きましたよね。

内田 兄貴が好きで開いて、失敗するんだけどね。それで僕らが苦労するんですよ。借金だらけになつちやつて。兄は法政大学だったんですよ。それで当時、磯前という友達がついて、それと一緒に神田でちっちゃな本屋をやつたらいいのね。それで面白いと、うちで始めるきっかけになんだよ。

― 敷地の中にあつたんですね。

内田 土間へ、ちよつどこの部屋ぐらゐかな。もうちよつとあつたな。

― それは貸本屋もやつてたんですか。

内田 貸本屋と新刊と。それから古本なんかも多少扱つてたのかな。それから雑誌やなんか。僕はよく手伝わされたからね。そ

の当時、『リーダーズ・ダイジェスト』がものすごい売れたんです。ところが、そういう売れる本はなかなか入ってこないの。

— 潔さんも配達に回ったりとかしたんですか。

内田 僕が配達する。注文はもうけども品物が入ってこない。そうすると、兄が「潔、買ってこい」って言うんで町の須原屋だとか文教堂とかに買いに行くんですけど、定価で買うんだから利益がないわけよね。その『リーダーズ・ダイジェスト』を自転車で大宮とか北浦和まで買いに行くんですよ。忘れもしないよ。

— 水上のもとに残っている書簡を見ると、故郷で当時水上書店を経営していた水上の弟、亨さんから内田書店に配本を依頼しているんです。雑誌を確保してほしいって。内田書店の後は相当苦労されたんですか。

内田 大変だったよ。だから僕は夜学ばかり行った。アルバイトで忙しくて大学も夜学だったから。でも、今考えて見てみれば、その後の仕事にすごいプラスになっている。そこで随分いろんな刺激を受けて、考えてみると僕は後々随分、得したんだね。

— この書店はどれくらい続いたんですか。

内田 三年か四年じゃないかな。水上がいなくなった頃、やめたんだからね。だから、三年かそこいらだと思うね。

— 「自伝抄」では書店経営をはじめたのは「二十四年の春」と書かれています。潔さんが一二歳ですね。

内田 そうだね。僕は昭和二八年に中学卒業だからね。水上さんが二年ぐらいから来たんじゃないかな。わが家にいたのが三年ぐらいかな。その後、出ていって、敏子の姉夫婦と一緒に家を新築すると言って建てたわけです。そこへ行って一カ月もしないで

うちに戻ってきた。おふくろがその時に言った言葉だと、利用されてあとで放り出されて行くところになるんだから、そして戻って来い、落ちゃんはおうちで見てやるからって言って、それで送り出すんだよね。僕んとは、金はなかったけど食いもんだけはあったのね。農地解放でかなり取られちゃったんだけどお煙を持っていた。完全に貸したのは、みんな二束三文で取られちゃった。だから煙やなんか、自作してたんですよ。

— 水上が建てたその家というのは、当時見に行ったのですか。

内田 見ました。一〇坪か一五坪ぐらいの平屋の。調宮神社の手前の中山道からちよっと入った所なんです。岸町の、あそこは何丁目になるのかな。二人、男の子がいて。（水上が内田家に）入るに当たって準備金やなんかを幾らかうちへ入れたらしいんだね。ところが、途中から一銭も払わないんだからね、あの人は。だから、その家を建てる時にも、少し保証金なんかを貸してくれみたいなことを言ったと思うんだ。それでおふくろは、これぐらいしかないよとか何とか言って渡して、そしたら途端に放り出されて戻ってくるわけ。おふくろが「ほら、言わんこっちゃない」って。それで水上は「ここはいいな」って言いながら飯食ってた。

それから間もなくしてですよ。護国寺へ越すのはね。もういづらくなくなっちゃってね。その後しばらくたってから、たまにちよこちよ顔出す時は、洋服の外商やパン屋さんをやってたんです。その当時パンつてのは配給で、隣組の配給が来ると、うちへ来るんですよ。ところが、うちはもらえないんですよ。僕は子どもですから、あの白いパンが食いたいなって見てるわけだね。そうすると、裏でおふくろが米を用意して、パンくれた人に米を少し渡

して交換するようなことをやったのね。それで、水上さんがパンの業界紙なんかをやった時に、パンに見本があるんですね。食パンにじかに墨でA、B、C、Dって書いてあるんだよね。それをお土産に持ってくる。「潔、パン持ってきたぞ、おまえ、パン好きだったな」って。それでその墨で書いてあるパンを食べてね。そういう記憶があるよ。

— 水上とはいづぐらいまで頻繁に行き来がありましたか。

内田 『霧と影』（一九五九年）が出たのはいつだったかな。その間、途中、そういう感じでポツンポツンと来たの。それから敏子さんの方も、ある時に突然来たんだね。敏子さんってのは、確か高田馬場かなんかの印刷屋さんと結婚したんでしょ？

— 水上が有名になった時はみなさん喜んでましたか。

内田 辰男は、まあまあだよ。ね。「鼻高い」ってどこかで言ってるくらいだから。僕は後になってから知って、水上って、うちにいたあの酔っぱらいだよっていう感じですよ。

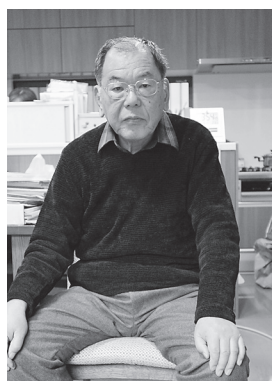
内田潔さんのことと、その後の水上との関わり

— 潔さんは朝日ソノラマ社にお勤めだったんですよね。

内田 僕は学校卒業したのは昭和三十六年の三月ですから、それからずっといました。初めの頃は、ソノシートってありましたが、あれに税金がかかるようになるんですよ。ちょうど東京オリピックの時に『オリピック賛歌』ができたり、音頭ができたり、それから『鉄腕アトム』だとか『鉄人28号』とか、ああいったものを課税する、しないとか、その時にできたのね。僕は税務担当なんだけど先生がいないんだよ。自分で勉強しろって言われて、

税務署が新しい商品ができると課税の対象にするでしょ。でも署員だって分かんないわけね。僕は能書き言って交渉して、それで一つのレールを作った。おかげで、皆さん知ってる小学館なんかの幼稚園や学年誌に付録でついたソノシートが税金からならないでできるようになったんです。そこに三年近くいた。その後、今度は制作をやる羽目になるんです。紙の手配だとか印刷だとか、管理だとか何だとか。そういうのを僕が全部やってたんです。

そういう中で、たまたま水上勉氏に原稿を依頼することになるのかな。ソノラマで頼んだのは児童書で、ああいう大作家っていうのは、児童書を書き残したいんだそうです。今でもそれは同じらしいですけどね。それで、あの人に『ヨルダンの蒼いつば』（一九七六年、ソノラマ文庫）ってのが確かあるはずですよ。それともう一つ、宮城まり子の関係で、ねむの木学園の子どもにカバ絵を頼んだことがあるんだ。これを使えって水上が言った。



図版④ 現在の内田潔さん

— 『さすらい山河・地底の声』（一九七七年、ソノラマ文庫、ねむの木学園が表紙画を担当）ですね。

内田 ソノラマの若いやつ連れて原稿を依頼に行くんですよ。ホテルオークラか帝国ホテルかどっちかだった。そこで久しぶりに会うわけです。「どうもしばらくです」って。先生とは言わず、水上さんって言ったと思うけど。うちではベンちゃんだったけど、僕はちびだったから、「僕、浦和の内田です。

白幡の内田ですよ」と言ったら、「おまえ、どれだ」って言うんだよ。一等下の、水上さんが俺のことを鼻たれ小僧と書いた潔だっ
て言ったら「え」ってね。おまえは今こういうところにいたのか、
なんていろいろ話して泣いちゃうんだよね。「母さん、どうした」つ
て聞かれて、死んだって言ったら、しばらく涙ぬぐってね。そう
したら「ところでみんなに会いたいな」って。じゃあ、会うよう
にしようと言って会ったのがこのとき（注四に挙げた『週刊朝日』
一九七八年二月二四日号の記事を指す。）なんです。

— 記事に内田家のご親戚、三〇人だったって書いてありますけど。それが久しぶりの再会の時ですね？

内田 そう、全員ではね。『霧と影』の発表会なんかには、僕は行っ
たんだよね。でもパッと出てきちゃったんだね。大勢だし、あん
まりかっこいい人たちがばかりだから。

先ほどの話に出た窪島誠一郎氏のことでですけど、明大前にいた
のね（幼少期から青年期を明大前の靴修理屋で送り、のちに小劇
場「キッド・アイラック・ホール」を経営してそこで水上と再会
する）。窪島氏は、まだこの時点では水上さんとおやじ・息子と
いう関係ではないんですね。それが世の中、狭くてね。僕は学生
時代、昭和二十九年から朝日新聞の支局でアルバイトしたんです
が、その誠一郎氏を見つけて新聞に発表したのが朝日の岩垂弘な
んです。社会部時代に国会前で安保闘争の取材中に警察機動隊に
殴られて重傷を負った男がいるんだよ。僕が浦和の支局でアルバ
イトしたときに、一緒にいたのが彼なんです。

— 支局にはどういうきつかけで行くことになったんですか。

内田 学校に誰かアルバイトやるやついないかって。その当時、

僕の所は金がないで、定時制高校へ行って、昼間は家の仕事を
手伝ってた。競馬場のアルバイト料が一等良かったので、馬券売
りのアルバイトをしたこともある。

— アルバイトは、どういうことをしていたんですか。

内田 お茶入れ、ストーブ焚き、掃除などもう全部。記者と同じ
こともやらされました。警察に朝、電話して取材したり、埼玉県
下の原稿全部、支局に送ってくるんですよ。昭和二十年、三十年
の前半は夕刊の原稿は全部、電話送稿なのでそれを取る。僕は速
記も多少習ったけど、大体一分間で二五〇字ぐらいしか取れな
かったな。浦和の支局って独特な支局だったのね。梅野啓吉局長
以下六名で、後に辰濃和男（ジャーナリスト、元朝日新聞記者で
「天声人語」を担当）もいた。

僕は長いことアルバイトしたから。七年ぐらいやったかな。そ
れで朝日（の入社試験を）受けたんだけど落ちて、昭和三十五年
だったかな。当時はソノプレスといった（同年、朝日ソノプレス
として創業）会社をつくるから、君は朝日の試験は通ってるから、
学科はやんなくていいと。それでソノラマの面接受けたんだよ。ね。
水上さんは、内田の家にいた頃はミナカミと言ってた。それで
ミズカミットムに変えるんだけど、昔講演を頼んだことがあるん
です。九州に熊日新聞（熊本日日新聞社）があるんですが、そこ
の文化部長だった山崎睦雄さんと会って、誰か講演を頼めないだ
ろうかって。それで、水上さんのことを申し上げたんです。そう
したら、ぜひお願いしたいという話になり、たまたま小倉で講演
会があって九州へ来るというのを、ついでで熊本まで足を伸ばし
てくれるかもしれないというので熊本に行っただけです。向こうに



図版⑤ 熊日の講演時の水上。右は光岡明。(山崎睦男氏提供)

上一流のリップサービスだったと思われる)。

それから、僕が辰濃和男と一緒に行った京都の祇園。水上は八坂神社のちよつと歩いていける距離にマンションを借りていた。水上が代表で、日本の文化人で代表団を組んで行ったでしょ(一九八九年、日中文化交流協会代表団の団長として北京を訪問)。行ったときにちょうど天安門の事件。それで、そのときに窓から見た絵を十枚くらい書いてんだよ、デッサンで。それで帰ってきたら、京都の八坂神社のマンションに行ったときにはカラーで書いてあった。でも日中の政治的な問題になるんで、今は出せないという。それで、見せるだけって僕と辰濃さんと二人で見せてもらって、大変生々しい絵(これは「心筋梗塞の前後」の装画になっている)だった。それでその訪中のとき、僕はちょうど銀座で路

ミズカミっていう地区があるそうです。それで、「俺は、本来ならばミズカミが本当なんだ。たまたま関東のほうへ行ったら水上温泉があるんでミナカミになっちゃったんだ」と言っていて、それがきっかけでミズカミツトムに変わるんですね(実際には以前から本の奥付では変更しているので、水

ちゃんとビール飲んだのよ。そしたら「きょう、父が帰ってくるんですよ」と言うので、「あの代表団で行ってたのが帰ってくるの? 羽田、成田、どっち?」と聞いたらく分かんないと言うので、すぐ僕が社会部へ電話を入れて、中国から第一便で帰ってくるはずだから、すぐに当たって。それでその日の朝日新聞の3版で出たんだよね。「北京で水上勉氏語る」って。それで、その帰りが、心筋梗塞で倒れるんですよ。

― たくさんのお話をありがとうございました。
本研究は、JSPS科研費JP16K02400の結果である。

注

*1 これまでの成果として、活字にしたものに、大木志門・掛野剛史・高橋孝次「水上勉宛田中英光書簡18通——水上勉資料の中から」(昭和文学研究)二〇一七年九月、大木志門・掛野剛史・高橋孝次「虹書房・日本繊維経済研究所時代の水上勉——北野英子氏・奥田利勝氏に聞く」(山梨大学国語・国文と国語教育)二〇一八年二月、掛野剛史「戦後出版界の「コマ」——水上勉の虹書房・新潮社時代」(『日本出版学会春季大会予稿集』二〇一八年五月)がある。

*2 祖田浩一編「年譜」(『水上勉全集』二六卷、一九七八年一月)

*3 内田辰男氏によれば、単身で来たのが「昭和22年頃」で、妻子を連れて来たのが「昭和23年の12月」だという(『浦和市広報』一九八〇年九月一〇日)。「凍てる庭」でも妻が娘を連れて来たのが「二十三年の十二月一日」となっている。

*4 「処女作『フライパンの歌』を書いた思い出の土蔵で涙した水上勉さん」(『週刊朝日』一九七八年二月二十四日号)

*5 「水上文学 土蔵に源」(『埼玉新聞』二〇一三年七月二十九日)

Mizukami Tsutomu's Days in Urawa

Interview with Mr. Kiyoshi Uchida

KAKENO, Takeshi OKI, Shimon TAKAHASHI, Koji

キーワード：水上勉、戦後文学、伝記、書店、文壇

Key words : mizukami tsutomu, after the war Literature, biography, Bookstore, literary world